

楽
曲
紹
介解
説
=
寺
西
基
之

9/13 | 9/22

9/13

9/22

ヴィヴァルディ (1678-1741)
ヴァイオリン協奏曲集『四季』
〔和声と創意の試み〕Op. 8-1~4)

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678-1741) はバロック時代のイタリアの作曲家で、急緩急の3楽章構成と、急の楽章におけるリトルネッロ形式 (合奏による部分が、独奏を中心とする自由な部分を挟んで何度か回帰する形式) を特徴とする当時の独奏協奏曲の様式の確立に大きく貢献した。彼の作品の中でも特に有名な『四季』は、1725年に出版された全12曲のヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』Op.8の第1番から第4番にあたる。作品そのものは出版のかなり前に成立していたようだ (作曲年・初演年は不明)。4曲ともバロック時代の独奏協奏曲様式の典型的な形をとるが、楽譜に四季を巡る自然と人間の営みを描くソネット (14行詩*) が付けられ、音楽もその詩の内容を描写したものとなっている点が独創的だ。作曲者自身はソネットは出版の際に初めて加えたと述べているが、音楽的な内容からみてソネットの内容に沿って作曲されていることは明らかである。

第1番 ホ長調「春」(RV269, P241, FI-22) 第1楽章 (アレグロ) は春の訪れの表現に相応しい生き生きした音楽で、独奏ヴァイオリンが鳥の歌を奏で、オーケストラには泉のせせらぎの描写が現れる。第2楽章 (ラルゴ) は草原でまどろむ羊飼いを独奏ヴァイオリンが表し、ヴィオラが犬の吠え声を模倣する。第3楽章 (アレグロ) は晴れやかな“田園舞曲”で、羊飼いや乙女たちの踊りが描かれる。

第2番 卜短調「夏」(RV315, P336, FI-23) 第1楽章(アレグロ・ノン・モルト)は暑さゆえのけだるさを表した楽章で、暑さにあえぐ人や家畜、強い北風、嵐を恐れる羊飼いの不安が表現される。第2楽章(アダージョ)は、暑さに参っている羊飼(独奏ヴァイオリン)に、蠅や蚊が襲う(オーケストラのヴァイオリンの付点リズム)。その間雷鳴を示すプレストが何度か挟まれる。第3楽章(プレスト)は“夏の激しい天気”を描写したフィナーレで、猛威を奮う嵐と雷鳴の轟きが表現される。

第3番 へ長調「秋」(RV293, P257, FI-24) 第1楽章(アレグロ)は収穫を祝う“村人たちの踊りと歌”。最後近くに、酔って眠り込む村人を表す部分が挟まれる。第2楽章(アダージョ・モルト)は“眠る酔っ払い”の様子を描いたけだるい静かな楽章。第3楽章(アレグロ)は活気に満ちた“狩”の音楽で、独奏ヴァイオリンには角笛を模した音型が現れ、オーケストラは鉄砲の音や猟犬の吠え声を模倣する。

第4番 へ短調「冬」(RV297, P442, FI-25) 第1楽章(アレグロ・ノン・モルト)は、雪と氷に覆われ、冷たい風が吹きすさぶ冬の風景。寒さゆえの足踏みやガチガチ鳴る歯の描写が面白い。第2楽章(ラルゴ)は炉端でのくつろぎが独奏ヴァイオリンのカンタービレで表現される。オーケストラのヴァイオリンのピッツィカートは戸外の雨の描写といわれるが、暖炉の立てるパチパチという音とする説もある。独奏ヴァイオリンで開始される第3楽章(アレグロ)は、氷上での滑りや転倒、北風と春を先取りする南風との衝突など、冬の様々な情景が巧みに表現される。

[作曲・初演年代] 不明

[楽器編成] 通奏低音、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

※ソネットの内容は次ページをご覧ください。

ヴィヴァルディ『四季』が表す情景
～楽譜に記されたソネットより

春 第1楽章 春がきた。小鳥たちは嬉しそうに歌い、春に挨拶する。西風の優しい息吹きに誘われ、泉は優しくつぶやきながら流れはじめる。すると空が暗くなり、春雷がとどろき、稲妻が光る。嵐が通りすぎると、小鳥たちは再び美しい調べを楽しそうに歌い出す。

第2楽章 ここ、花ざかりの美しい牧場では、木々の葉が優しくささやく、山羊飼いが忠実な犬をはべらし、眠りこけている。

第3楽章 ニンフたちと羊飼いたちは、輝くばかりの春の装いのなか、田園風な牧笛の陽気な調べに合わせ、楽しそうに踊る。

夏 第1楽章 太陽が焼くつくように照るこの厳しい季節に、人と家畜は活力を失い、木や草でさえ暑がっている。かっこうが鳴きはじめ、山鳩とひわが歌う。そよ風が心地よく吹く。しかし北風が不意にそよ風に襲いかかる。羊飼いは雨を恐れ、自分の不運を嘆いて涙を流す。

第2楽章 稲妻、雷鳴、そして群れなす無数の蠅。そのため羊飼いの疲れた身体は休まることがない。

第3楽章 ああ、羊飼いの恐れはなんと正しかったことだろう！ 空は雷鳴をとどろかせ、稲妻を光らせ、あられさえ降らせて、熟した穀物の穂を痛めつける。

秋 第1楽章 村人たちは踊りと歌で、豊かな収穫を喜び、祝う。バッカスの酒のおかげで座は沸きに沸き、ついにはみんな眠りこけてしまう。

第2楽章 一同が踊りをやめ、歌をやめたあとは、おだやかな空気が心地よい。そしてこの季節は、甘い眠りが人々をすばらしい憩いに誘ってくれる。

第3楽章 狩人たちは夜明けに狩に出かける。角笛と鉄砲を持ち、犬たちを連れて。獣は逃げ、彼らは追いかける。獣はおびえ、鉄砲の音と犬の鳴き声に疲れ果て、傷つき、おののいている。そして逃げる力も衰え、追いつめられて死ぬ。

冬 第1楽章 冷たい雪の中、凍えてふるえながら、吹きすさぶ恐ろしい風に向かって人がゆく。休みなしに足踏みしているが、あまりの寒さに歯の根も合わない。

第2楽章 火のかたわらで静かに、満ち足りた日々を送る。その間、家の外では雨が万物を潤す。

第3楽章 氷の上を、転ばぬようゆっくりした足取りで注意深く進む。乱暴に歩いて滑って転ぶ。だが起き上がり、氷が砕け、割れ目ができるほど激しい勢いで走る。締め切った扉から外に出て、南風、北風、そしてあらゆる風たちが戦っているのに耳を澄ます。これが冬なのだ。このようにして冬は喜びをもたらす。

ホルスト(1874-1934)

組曲『惑星』Op. 32

イギリス近代の作曲家グスターヴ・ホルスト(1874-1934)の作品の中でも特に親しまれている組曲『惑星』は、太陽系の惑星を1曲ごとに表現したきわめてユニークな作品である。1913年に友人の作家クリフォード・バックスから占星術についての話を聞かされて星に関心を持つようになったことが、作品の構想のきっかけとなったようだ。こうして第1次大戦前夜の1914年に第1曲「火星」が生み出され、続いて残る6つの惑星を描く曲が書かれて、1916年に全7曲の組曲『惑星』が完成された。4管の大編成を生かした壮大なサウンドと精妙な楽器法による繊細な響きを巧みに織り交ぜた作品で、各曲は惑星そのものの描写ではなく、惑星にまつわる神々の性格表現となっており、そのことが作品に大きなイマジネーションの広がりを与えている。私的な初演は1918年9月29日ロンドンで若きエイドリアン・ボルト指揮のニュー・クィーンズ・ホール管弦楽団によって行われて成功を収めた。その後部分的に公開演奏された後、1920年11月15日ロンドンにおいてアルバート・コーツ指揮ロンドン交響楽団により全曲の公開初演がなされている。

第1曲「火星、戦争をもたらす者」 アレグロ。冒頭ティンパニ、ハーブ、コル・レーニョの弦が刻む5拍子の不気味なリズムが第1曲の基調となる。第1次大戦を予感するかのような、威圧感に満ちた迫力ある音楽である。

第2曲「金星、平和をもたらす者」 アダージョ。静謐な緩徐楽章。神秘的な雰囲気醸し出すチェレスタとハーブが美しい。

第3曲「水星、翼のある使者」 ヴィヴァーチェ。変幻自在な動きを持つ軽やかなスケルツォ。複調(2つの調を同時に用いる)やポリリズム(異なるリズムを同時に用いる)が効果的に用いられている。

第4曲「木星、喜悦をもたらす者」 アレグロ・ジョコソ。力強い明るさに満ちた主部に対し、中間部(アンダンテ・マエストロ)では親しみやすい主題が歌われるが、これは作曲者の娘イモージェンによれば「聴く者に愛国主義的な気持

9/13

9/22

ちを抱かせる」旋律で、実際イギリスの愛国歌ともなった(日本では平原綾香が「ジュピター」の題で歌っておなじみの旋律)。

第5曲「土星、老年をもたらす者」 アダージョ。落ち着いた伴奏を背景にコントラバスの重々しい主題が奏される。大きな盛り上がりを築く中間部の後、ハープに彩られた静かで神秘的な第3部(アンダンテ)が続く。

第6曲「天王星、魔術師」 アレグロ。スケルツォ風の趣の曲で、金管のモットー主題、ファゴットの不気味な主題、おどけた主題、ホルンと弦による誇らかな主題などが次々と登場、威圧的な行進曲風の主題が頂点を築く。しかしその勢いはオルガンのグリッサンドで突然止められ、コーダに入る。

第7曲「海王星、神秘なる者」 アンダンテ。ピアニッシモの精妙な書法で織り成された終曲で、ハープとチェレスタが効果的だ。後半(アレグレット)は母音唱法による舞台裏の女声合唱の幽玄な響きも加わり、この世ならぬ雰囲気醸し出される。最後は合唱だけが残り、宇宙の彼方へ消え入るように終わる。

【作曲年代】1914～1916年 【初演】非公開：1918年9月29日 ロンドン／公開初演(ただし5曲のみ)：1919年2月27日 ロンドン／公開初演(全曲)：1920年11月15日 ロンドン

【楽器編成】フルート4(3番はピッコロ持ち替え、4番はピッコロとバス・フルート持ち替え)、オーボエ3(3番はバス・オーボエ持ち替え)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バス・クラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、テナー・チューバ、バス・チューバ、ティンパニ(奏者2)、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、シンバル、タムタム、鐘(チューブラーベル)、グロックンシュピール、シロフォン)、ハープ2、チェレスタ、オルガン、弦楽5部、女声6部合唱

てらにしもとゆき(音楽評論)／1956年生まれ。上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程(西洋音楽史専攻)修了。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京二期会評議員、(公財)東京交響楽団監事、日本製鉄音楽賞選考委員、(公財)アフィニス文化財団理事などを務める。共訳書にグラウト／パリスカ『新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。